

ダニエル書 - 第五十七号

ヨハネの黙示録の預言の秘密を解き明かす：終末預言を巡る旅

Jeff Pippenger

2024-01-21

すべての預言者は世の終わりについて語っており、すべての預言は黙示録において一つに集約され、そこで完結する。黙示録ではダニエル書と同じ筋が取り上げられている。なぜなら両者は同じ書だからである。これらの預言の原則はすべて、先の記事に確固として記録されている。黙示録は、恩恵期間が閉じる直前に、封印されていた預言が解かれることを私たちに知らせている。これらの記事は、今まさに封印が解かれつつある黙示録のメッセージに結びつく預言的要素を提示してきた。そのメッセージは単一の預言的真理ではなく、いま解き明かされつつあるメッセージのすべての要素は、イエス・キリストの黙示という範疇に属する。

そのメッセージは、猶予期間の終わりの直前、すなわち「時が近づいた」ときに封印が解かれる。ダニエル書と黙示録は、「預言の霊」の著作からの注解とともに、預言的メッセージの封印が解かれる過程について非常に具体的に述べている。封印を解くのはユダの部族の獅子であり、その際、彼はメッセージを提示するために体系的な方法を用いる。彼は、七つの封印で封じられた聖書を手にしておられる姿で表される父からそのメッセージを受け取る。ダビデの根であり、またほふられた小羊でもあるユダの部族の獅子は、父からその書を受け取り、封印を解く。

イエスはそのメッセージをガブリエルに託し、ガブリエルは他の天使たちとともにそのメッセージを預言者に伝える。預言者はそのメッセージを書き記し、諸教会に送る。やがて預言的メッセージの封印を解く時が来ると、その開封は、預言者の著作の対象となる教会内の人々を試す三段階の試しの過程を生み出し、教会員一人ひとりの応答に基づいて、自分が二つの区分のどちらに属するかが定まる。封印が解かれたメッセージによってもたらされる知識の増大を受け入れる者は「賢い者」とされ、受け入れない者は、ダニエルにおいては「悪しき者」、マタイにおいては「愚かな者」とされる。

最後の預言の秘密の封印が解かれることに関わるこれらすべての要素は、黙示録17章9節で取り上げられ、強調されている。というのも、そこでは、礼拝者の二つの部類を試すことになるイエス・キリストの啓示の一要素が示されているからである。それは、同節の警告の旗印に続くメッセージを理解するのは「賢い者」であると特定することによって、そうしている。

そして、ここに知恵ある者の思いがある。七つの頭は、女が座っている七つの山である。また、七人の王がいる。五人はすでに倒れ、一人は今いる。もう一人はまだ来っていない。やがて彼が来るときには、短い間だけとどまらなければならない。そして、かつてはいたが今はいない獣は、八番目であり、七人のうちの一人でもあり、滅びに至る。
黙示録 17:9-11

「知恵のある思い」とは「賢い者」の思いである。「賢い者」は知識の増加を理解する。そして、賢い者には理解され悪者には退けられる真理を特定する預言的な標識の直後に示されているその知識の増加とは、続く節々に述べられている聖書預言の諸王国に関する真理のことである。それらの節は、聖書預言における諸王国の最後の描写を表しており、終わりの時に封印が解かれて明らかにされるのは、その八つの王国が、ダニエル書二章にある聖書預言の諸王国の最初の描写にも表されているということである。

その真理の啓示は、ミラーの「宝石」の一つを成していた聖書の預言における諸王国についての限定的な見解を支持するが、それは十倍も明るく輝いた。というのも、それは歴史の限られた時点からミラー派が理解していたよりもはるかに多くの真理を備えており、また、「十」という数が示すように試しを表し、さらに「ここに知恵のある心がある」という導入の警告が鳴らす警鐘によっても示されているように、恩恵期間の終わりの直前に封印が解かれて届けられるメッセージを受け取る諸教会を試すものだと、預言的に解釈されるからである。

黙示録17章では、ヨハネは教皇権の暗黒が一千二百六十年続いた荒野へと連れて行かれた。彼はその期間のまさに終わりである1798年に置かれたが、それは黙示録13章で彼が置かれたのと同じ歴史的時点である。

私は海辺の砂の上に立ち、海から一匹の獣が上ってくるのを見た。それは七つの頭と十本の角を持ち、その角には十の冠があり、その頭には冒涇の名が記されていた。黙示録 13:1

「海の砂」は1798年を表している。というのも、それは、ヨハネに教皇権（海の獣）が過去のものとして示され、アメリカ合衆国（地の獣）が台頭し、間もなく到来する日曜法においてついには竜のように語る、という歴史的視点を表しているからである。その後、地の獣は世界に「獣の像」を受け入れさせ、その像が語り、全世界に対して日曜立法を施行する。

「教皇権が力を奪われ、迫害をやめざるを得なくなった時、ヨハネは、竜の声に呼応して同じ残酷で冒涇的な働きを推し進める新しい勢力が台頭するのを見た。この勢力は、教会と神の律法に戦いを挑む最後の勢力であり、子羊のような角を持つ獣として表されている。それに先立つ獣は海から上って来たが、これは地から上って来た。それは、それが象徴する国家、すなわちアメリカ合衆国の平和的な台頭を表している。」 Signs of the Times, 1910年2月8日。

ヨハネは、第十七章で聖書預言における諸王国の最終的な提示を受けるために、歴史の同じ視点へと連れて行かれる。その視点に立って、諸王国が示される。まず彼は、獣が教会と国家の双方を支配していることを知らされる。というのも、彼女は七つの頭の上だけでなく、七つの山の上にも座しているからである。大淫婦が座しているという事実は、彼女こそ獣に乗っている者であることを示しており、そして獣に乗る者こそ獣を支配する者である。

そして、あなたが見た女は、地の王たちの上に君臨している大いなる都である。ヨハネの黙示録 17:18。

「reigneth」という語は、保持し、支配することを意味する。乗り手は手綱を握ることで獣を支配する。教皇権は七つの頭と七つの山をも支配している。ダニエル書第2章で、ダニエルはネブカドネザルに、彼が金の「頭」であると告げる。イザヤ書第7章では、「頭」はまた、王、議事堂、あるいは王国をも意味する。

というのは、シリアの頭はダマスコであり、ダマスコの頭はレツィンである。六十五年のうちに、エフライムは打ち砕かれて、もはや民ではなくなる。エフライムの頭はサマリアであり、サマリアの頭はレマルヤの子である。あなたがたが信じないなら、必ず堅く立つことはできない。イザヤ書 7:7、8。

獣に乗った女である教皇権は、地のすべての王たちを支配している。その王たちは「十人の王」として表されており、それは終末時代の竜の勢力である。彼らは、ツロの淫婦が姦淫を行う相手となる王たちである。その「十人の王たち」は教皇権の権威を受け入れることを強いられてきたが、その十人の王の筆頭はアメリカ合衆国である。ゆえにアメリカ合衆国は、イスラエル北王国の十部族を治めた王アハブとしても表される。「七」という数は「完全」を表す。また、教皇権が地の王たちの上に君臨しているさまが描かれるとき、彼女は十人の王の上にも君臨しており、七つの頭の上に座している。

ここに知恵のある思いがある。終わりの時代の賢い者たちは「line upon line」という方法論を用い、淫婦が支配する国家権力の諸象徴の一つひとつが同じ真理を指し示していることを認識している。彼女はまた七つの山を支配しており、ミラー派は聖書の預言における「山」を王国の象徴と見なしたが、象徴には複数の意味があることも認識していた。

山はまた教会の象徴でもある。聖書における「栄光ある聖なる山」は、神の教会を表している。

アモツの子イザヤがユダとエルサレムについて見た言葉。終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く据えられ、丘々よりも高くそびえ、すべての国々がそこに流れ集まる。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主は御自分の道を私たちに教え、私たちはその道筋を歩もう。」シオンから律法が出、エルサレムから主の言葉が出るからである。イザヤ書 2:1-3

「主の家」は主の教会であり、それは「山」である。大淫婦は七つの山の上に座している。これは、彼女がすべての王たちを支配しているのと同様に、すべての教会をも支配していることを示している。彼女は全世界のすべての教会とすべての国家を支配している。

先ほど引用した、イザヤが「ユダとエルサレムについて」彼に臨んだと述べている幻は、そのまま続き、第4章でも同じ預言に属している。そしてイザヤによれば、それは人々が「さあ、主の山に、ヤコブの神の家に上ろう」と言う「同じ日」のことである。その同じ時期に「七人の女」が言及されている。

その日には、七人の女がひとりの男にすがりついて言う。「私たちは自分のパンを食べ、自分の衣を着ます。ただ、私たちがあなたの名で呼ばれるようにしてください。私たちの恥を取り除いてください。」その日、主の若枝は麗しく栄光に輝き、地の実はイスラエルの逃れの者たちにとって尊く麗しいものとなる。そして、シオンに残された者、エルサレムにとどまる者は皆、すなわちエルサレムで生きる者として記された

者は皆、聖なる者と呼ばれるようになる。これは、主がさばきの霊と焼き尽くす霊によって、シオンの娘たちの汚れを洗い流し、エルサレムの血をそのただ中からすすぎ去られるときである。主はまた、シオンの山のすべての住まいと、その集会の上に、昼は雲と煙、夜は燃える炎の輝きを創り出される。すべての栄光の上には覆いがあるからである。また、昼には暑さを避ける陰となる幕屋があり、避け所となり、嵐と雨を避ける隠れ場となる。イザヤ書 4:1-6

イザヤの幻の主題である「日」は、ヨハネの黙示録11章の大地震の「時」である。2020年7月18日の失望から「帰れ」との勧告を受け入れ、レビ記二十六章の条件を満たし、さらにエゼキエル書の第一の預言によって一つに集められた賢い者たちは、イスラムの四つの風に関するエゼキエル書の第二のメッセージを受け入れるときに封印される。彼らはその後、旗印として天に掲げられ、バビロンにいる神のほかの子らは、バビロンから出よとの呼びかけに応じ始める。この呼びかけは、その地震において始まるが、その地震とは、間もなく到来する日曜法のことである。神のほかの群れはバビロンから出よとのメッセージを聞き、「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう」と宣言する。

その「時」に、大淫婦は歌を歌いはじめ、地の王たちと姦淫を行う。子羊のいのちの書に名の記されていない者たちはこの淫婦に従い、彼らの教会は彼女の権威のもとに置かれる。これらの教会はイザヤによって「七人の女」として表されている。その「七人の女」は、教皇制が支配する「七つの山」であり、アメリカ合衆国が全世界に獣の像を築くことを強いると、その像は語り、すべての者に教皇の権威の刻印を受けさせる。

あの「七人の女が一人の男にすぎる」ということ、そしてその「男」とは、パウロが「罪の人」として指し示す「男」のことです。その試練の期間には、エルサレムに残る者は、「エルサレムで生きる者のうちに名を記された者はみな、聖と呼ばれる」。神の民とは、その時期に、命の書、すなわち世の初めから屠られた小羊の命の書に名が記されている者たちです。これに対して、「罪の人」にすぎるもう一方の一群は、黙示録第十三章に登場する、罪の人を礼拝する者たちです。

地に住む者のうち、世の初めからほふられた子羊のいのちの書に名が記されていない者はみな、彼を拝む。耳のある者は、聞きなさい。黙示録 13:8, 9.

大地震の「時」、すなわち日曜法の危機は、調査審判の終結であり、その審判は、あなたの名がいのちの書に記されているか、記されていないかに基づいて下される。したがって、その時、いのちの書との関係によって示される二つの階級が、審判の最終場面を明らかにしている。『罪の人』にすぎりつく者たちは、「自分のパンを食べ、自分の衣服を着る」と宣言するが、彼らの第一の願いは「あなたの名で呼ばれること」である。

彼らは自分たちの教理的信条（自分のパンを食べ）を保持し、宗派としての告白（自分の衣）も保持するが、「罪の人」の名は受け入れる。「罪の人」の名は「カトリック」であり、それは「普遍的」という意味である。「罪の人」に与する者たちは、「普遍的な教会」、すなわちカトリック教会の一部になりたいと願う。彼らは自分たちの「そしり」を「取り去る」ために、その関係を望む。

「非難」は、終末にすべての教会と諸国民を支配する獣の二つの重要な要素を取り上げている。黙示録十一章の「大地震の時」に、「第三のわざわいはすぐに来る」。この「第三のわざわい」はイスラムである。黙示録十一章の「大地震の時」に、第七のラッパが鳴り響く。第七のラッパはイスラムである。世界史を通じて強制された日曜礼拝に対する裁きにおいて、すべてのラッパは神が用いてこられた予言的手段であるゆえ、イスラムは「大地震の時」に襲いかかる。

「間もなく来る日曜法」の際にアメリカ合衆国の「国家的破滅」がもたらされるとき、「諸国民は怒る」。創世記に見られるイスラム教への最初の言及が示しているように、聖書の預言において諸国民を怒らせるのはイスラム教である。

主の御使いは彼女に言った。「見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたからである。彼は荒々しい人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手も彼に逆らう。彼はすべての兄弟たちに向かい合って住むであろう。」創世記16:11、12。

終末の「そしり」はイスラム教という宗教である。世界の諸教会と諸国は、カトリック教会に支配される国際連合の新世界秩序の権威下に置かれるだろう。教皇は、コンスタンティヌスが西暦330年に教皇制度にその座を与えたのと同様に、世界統一体制の座に就くことになる。諸国は、イスラムが人類に対して仕掛けている戦争に対処する能力は一致した取り組みによってのみ達成できると判断し、そのためには何らかの道徳的権威への服従が必要だとするだろう。そして、その権威こそローマ教会であるとアメリカ合衆国が主張するのだ。ユスティニアヌスが西暦533年にカトリック教会に大いなる権威を与えたのと同じように、歴史は繰り返される。合衆国は、その軍事力によって世界を服従させるだろう。それは、クロヴィスが西暦496年にカトリック教会のためにそうしたのと同じである。黙示録13章2節の歴史が繰り返されるだろう。

私が見た獣は豹のようで、その足は熊の足のよう、その口は獅子の口のようであった。竜は自分の力と位と大いなる権威をその獣に与えた。黙示録 13:2。

その像が据えられると、イスラムによる攻撃に怒りを募らせてきた地の王たちは、獣の世界的な像を生み出すために用いられてきたイスラムに対する普遍的な「非難」が、「罪の人」（イゼベル）が実際に関心を寄せていた「非難」ではなかったことを認めるだろう。時すでに遅く、世界は、イゼベルがイスラムには何の関心も抱いておらず、むしろヘロデヤがバプテスマのヨハネを殺したように、彼女の心がエリヤを殺すことを望んでいるのだと知ることになる。

「知恵ある心」とは「賢い者の心」であり、その「賢い者」とは、猶予期間が閉じられる直前にユダ族の獅子がイエス・キリストの黙示の封印を解くときにもたらされる「知識の増加」を理解する者たちである。

そして彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封印してはならない。時が近いからである。不義を行う者はなお不義を行わせ、汚れた者はなお汚れたままでおらせ、義なる者はなお義を行わせ、聖なる者はなお聖くあらせよ。」ヨハネの黙示録 22:10、11

「七つの頭は、女が座っている七つの山である」という記述は、教皇制が教会と国家の双方を支配するという真理を表している。象徴には複数の意味があり、象徴はそれが示されている箇所文脈によって定義され、理解されるべきである。そこで、この節は頭が山であると特定しているのだから、頭（国家権力）と山（教会権力）を区別して捉えることの正当化の根拠は何か、という議論が生じる。その区別はダニエル書七章と八章において確立されている。七章では、異教ローマと教皇ローマはいずれも、それ以前の獣たちとは「異なる」ものとして示されている。

7章を8章の上に重ね合わせると（行に行を重ねるように）、8章にはローマの小さな角が、男、女、男、女のあいだを揺れ動いているのが見て取れます。一つの象徴（小さな角）が二つの勢力を表しているのです。これらの章では、角は王国を意味し、王国はまた頭でもあります。8章では、その小さな角は二つの王国、すなわち聖書預言における第四と第五の王国を表しています。小さな角は象徴的に二つの王国を表しており、そこに示される二つの王国は、国家権力と教権の結合を示す王国です。七つの頭（七つの山でもある）も二つの王国を表しており、その一方は教権、もう一方は国家権力です。

ダニエル書第2章には、この預言的象徴に対するもう一つの証しがある。というのは、ここでは、ミラー派がローマの第四の王国と理解した最後の王国が、鉄と粘土によって表されているからである。鉄と粘土は結び合わされているが、現実には鉄は粘土とは結び合わない。それでもホワイト姉妹が「鉄と粘土」について論じるとき、彼女はそれを、8章の小さな角や、山でもある黙示録17章の頭によっても表されている、教会権力と国家権力の象徴だと見なしている。

私たちは、鉄がぬかるんだ粘土と混じり合った像の足によって神の聖なるみわざが象徴される時代に至った。神には選ばれた民がいる。その民の識別は聖められなければならない。神の戒めに忠実なすべての魂は、私たちの信仰の際立った特色が第七日安息日であることを認めるだろう。もし政府が、神が命じられたとおりに安息日を尊ぶなら、神の力によって堅く立ち、また、一度聖徒たちに授けられた信仰を擁護することになるだろう。しかし、為政者たちは偽りの安息日を擁護し、教皇制の産物であるこの日の遵守に自らの宗教的信仰を混ぜ合わせ、主が聖別し祝福され、人が聖として守るように取り分けられ、御自身とその民との間の千世代にわたるしるしとされた安息日よりも上位にそれを置くであろう。教権と政権の混合は、鉄と粘土によって表されている。この結合は、諸教会のあらゆる力を弱めている。教会に国家の権力を付与することは、悪しき結果をもたらすだろう。人々はほとんど神の忍耐の限界を越えようとしている。彼らは自らの力を政治に注ぎ、教皇制と結びついた。しかし、神がご自分の律法を無効にした者たちを罰し、彼らの悪しき業が彼ら自身に跳ね返る時が来るだろう。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第4巻、1168、1169頁。

次回の記事でこの研究を続けます。

私たちのためのキリストの働きと、私たちに対するサタンの執拗な告発が描かれている場面で、ヨシュアは大祭司として立ち、神の戒めを守る民のために取りなす。同時にサタンは神の民を大罪人として告発し、生涯にわたり彼らに犯させるよう誘惑してきた罪の一覧を神のみ前に差し出し、その違反のゆえに彼らを自分の手に引き渡して

滅ぼすべきだと迫る。彼は、悪の連合に対して奉仕する御使いたちの保護を彼らが受けるべきではないとも主張する。彼は、神の民を世と一つの束にまとめて自分に完全な忠誠を誓わせることができないため、怒りに満ちている。王たちや支配者、総督たちは、自らその身に反キリストの烙印を押し、神の戒めを守リイエスの信仰を持つ者たち、すなわち聖徒たちと戦おうと出ていく竜として描かれている。神の民に対する彼らの敵意において、彼らはまた、キリストの代わりにバラバを選んだ罪においても有罪であることを自ら示している。

神はこの世に対して訴えをお持ちである。裁きの座が設けられ、書が開かれるとき、神は恐るべき清算をなさねばならない。もし人々がサタンの幻惑と欺きに目をくらまされ、たぶらかされていなければ、それは今この世を恐れおののかせたであろう。神は、その独り子の死について、この世に責任をお求めになる。というのも、この世は、御民を迫害することにおいて、事実上、御子を新たに十字架につけ、公然と辱めたからである。この世は、御自分の聖徒たちのうちに現れておられるキリストを退け、預言者、使徒、そして使者たちのメッセージを拒むことによって、主のメッセージを拒んだ。彼らはキリストの同労者であった者たちを退けたのであり、このことについて彼らは申し開きをしなければならない。Testimonies to Ministers、38、39.